もののふガールズ2
姉妹剣士がお相手します
小説 蒼井村正　挿絵 天草帳
二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

第一章　鳴美沢学園近代剣術部　006
第二章　恋人の父　020
第三章　剣士姉妹　070
第四章　氷の少女が蕩けるとき　124
第五章　修行の成果　173
第六章　遺伝子を継ぐ者　212
第七章　そして、新年度　244

登場人物紹介

Characters

三沢(みさわ) 玲(れい)

鳴美沢学園近代剣術部の部長。黒いショートカットが凛々しいクールビューティー。落ち着いた口調で話す、凛とした美貌の少女。

三沢(みさわ) 一枝(かずえ)

玲の従妹にあたる親戚の少女。小学生と間違われるような小柄で華奢な体格だが、玲とほぼ互角の剣士としての腕を持つ。

三沢(みさわ) 朋香(ともか)

かなり年齢の離れた一枝の姉。大人びた美貌と、ダイナマイトボディの持ち主で、性格は子供っぽくて甘えん坊。

結城(ゆうき) 美与(みよ)

赤いツインテールが特徴的な天然系の爆乳メガネっ娘。玲とは幼馴染み。

クロエ・レーヴァンティン

日本に剣の修行のために来ている留学生。剣の道一筋で、生真面目な性格。

楢沢(ならさわ) 修也(しゅうや)

剣士の遺伝子をその身に秘めた、中性的な顔立ちの小柄な少年。非常に惚れっぽく超優柔不断な性格。

『第二章　恋人の父』より

「玲さん……大好きですッ！」
感極まった声を上げた修也は、はだけられたシャツの狭間から垣間見える美乳に手を伸ばして鷲掴みにする。
甘い媚香を放つ汗でしっとりと濡れた乳肌は、たまらない弾力で指を押し返し、手のひらに吸いついてくる。
「ふぁ、あ、あぁぁ……もっと、修也……はぁぁうんっ！」
シャツの裏地に擦られて、硬く勃起した乳首を指の腹で撫で転がしてやると、ひときわ高い声を上げた玲は、指を噛んで嬌声を堪えながら、しなやかな肢体を弓なりにのけぞらせる。
「もっ、もうガマンできません！　修也殿……私も一緒に可愛がってください」
睦(むつ)み合う二人の様子に欲情を煽られたクロエが、顔面騎乗でまたがってきた。
マリンブルーの競泳水着に包まれた股間と、キュッと引き締まった純白のヒップが視界いっぱいに広がり、滑らかな内腿が興奮に火照った少年の顔を挟み込む。
ジューシーな果実を思わせる愛液の芳香が、牡の本能を燃え立たせた。
「クロエさん……はふ、ぴちゃぴちゃぴちゃ、ぴちゅ……ちゅぱっ……」
込み上げる欲情のまま、しなやかなナイロン生地越しの秘部にむしゃぶりつく修也。
「ハァァァンッ！」

恍惚の声を上げたクロエの秘裂が、艶めかしく蠢くのが、股布越しに伝わってきた。
「あふ、んっ、ちゅぱ、ちゅぱ、ちゅぱ、ぴちゃ、ぴちゅ、ぴちゅ、あふ、ちゅうっ……」
競泳水着の股布に浮き出たワレメに沿って舌を滑らせ、クンニ奉仕に没頭する。
ふっくらと盛り上がった恥丘全体に唾液を塗り込み、唇を吸いつかせながら舐めしゃぶると、じきに、布地を染み通ってきた愛液の熱さと味が舌先に感じられるようになる。
「あはぁぁん！　修也殿、直に……舐めてください」
布越しのもどかしいクンニ奉仕に満足できなかったクロエは、股布部分をクイッ、とずらし、鮮やかな桜色の秘部を剥き出しにする。
色素の薄い秘裂は、クンニ快感に充血して濡れ開き、フレッシュピンクの媚粘膜を覗かせて、少年の愛撫を待っている。
「んぁ、ちゅぴっ、あむ……ぴちゅぴちゅぴちゅぴちゅ……はむ……んふ、くちゅくちゅくちゅ……ちゅっ、ちゅるっ、ちゅるるるっ！」
あらわになった柔肉のワレメに舌を滑り込ませた修也は、物欲しげにヒクついている膣口に舌先を潜らせて掻き回し、卑猥な収縮を起こす肉孔の奥から溢れ出てきた蜜液を吸引する。
「ハァァァンッ！　ヤッ……修也殿……気持ち……いいですッ！　あッ、そこッ、もっと掻き回して……ンアァァンッ！」

敏感な膣粘膜を舌先で攪拌(かくはん)された金髪少女は、競泳水着に包まれた肢体をのけぞらせて奔放に乱れた。
膣口から沸き起こった喜悦の波が身体の芯を駆け抜けるたびに、普段はクールな少女の声が喜悦に蕩け、甘さと艶やかさを増してゆく。
「んふふっ、タマタマちゃん、引き締まってて、美味しそう。いただきまーす♪　はむはむはむ……ちゅぱちゅぱ、れろっ、ぴちゅぴちゅぴちゅ……ちゅむっ」
修也の股間に顔を突っ込んだ美与は、クルミのように固く引き締まった陰嚢を大胆な舌使いで舐めしゃぶり、会陰部やアヌスの蕾にまで舌先を這わせて舐めくすぐってくる。
「んぁ、あぁぁ、はむ……ちゅぱちゅぱ……あふ、ちゅるるっ！」
熱く柔らかな舌で、恥ずかしい部分を舐めくすぐられる快感に喘ぎつつ、修也は溢れ出す愛液で口元を濡れ光らせ、クロエの秘部にクンニ奉仕しながら玲の美乳を揉みしだく。
「ファ、あッ、あッ、あッ、修也殿……気持ち、いいでスッ！　ひゃあウンッ！」
快感にわななくワレメ全体を大胆な舌使いで舐め回し、秘裂の頂点で包皮から顔を覗かせたクリトリスに吸いつくと、競泳水着に包まれた純白ボディが激しくわなないた。
「修也、わたしも気持ちいいぞ……もっと、強くしても……んっ、あッ、はぁぁん！」
乳房を荒々しく揉みこねられながら、玲は騎乗位で結合した桃尻をくねらせ、弾ませて、抽挿快感を堪能する。

（すごい……気持ちよすぎて……何も考えられなくなっちゃう……）

クロエと玲の上げる甘く艶めかしい声が、二重奏となって響き、ペニスを貪る上下動はさらに激しくなって、許容量を超えた快感で、少年の意識を白濁させた。

「凄い……玲ちんのお汁がタマタマまで濡らしてるよ……全部舐めてあげる、はぷ、れろれろれろっ、ちゅぱちゅぱちゅぱ……あはぁ、美味しい」

興奮したメガネッ子は、親友の愛液に濡れた少年の肉玉をしゃぶり回し、自慢の豊乳で、修也の太腿を挟み込んでマッサージを仕掛けてくる。

「修也殿ぉ……もっと、もっと吸ってください……ンハァァン！　そっ、そこですッ！」

クリトリスを吸われる、痺れるような快感に酔いしれながら、クロエは少年の胸板を撫で回し、小さな肉粒のような乳首を指先で捉えてクリクリと揉み責めてくる。

「んふぅ……ッ！」

乳首から発した鮮烈な快感に呻く修也。

「んっ、んんんっ！　しゅ、修也ッ！」

すすり泣くような声を上げる玲の膣壁に締めつけながら擦り上げられたペニスが、ビクビクと制御不能の脈動を開始した。

「タマタマがキュッ、ってなってきた。シャセイ、しそうなの？　ふふふっ、もっといっぱい気持ちよくしてあげちゃう。れろぉ、レロレロレロレロッ……チュプッ！」

美与の舌と唇が、陰嚢とアヌスを舐めくすぐって、快感の追い打ちを掛けてくる。
「だっ、ダメですっ！　出るッ！　出ちゃうっ！　あ、あぁ……くあぁ……ッ！」
クンニ奉仕も中断してのけぞり、絶頂の声を上げる修也。
耐えに耐えていた射精欲求が、我慢できぬほど強まり、ペニスの奥から熱くむず痒いものがせり上がってくる。
「あぁぁッ！　あと少し、少しだから……ガマンしてくれ……」
「ひぁ……出ますッ！　ごっ、ごめんなさいっ！　あ、はぁぁぁん！」
玲が絶頂するのを待てず、女の子のような艶めかしい声を上げて、ペニスを暴発させてしまう修也。
びくっ！　びくびくびくびくんっ！　どくっ、びゅうううっ！　どくんっ、びゅうっ！　どぷっ、びゅうっ、びゅうっ、びゅるるるっ……！
気が遠くなりそうな快感で意識を漂白しながら、濃厚なスペルマが勃起の芯を走り抜け、熱い膣内にぶちまけられた。
「あぁぁっ、修也ッ……んんっ！　あ、あぁぁん……ッ」
膣壁に弾ける暴発スペルマの熱さに切なげな声を上げてしまいながら、絶頂を逃した玲は、もどかしげに尻を弾ませている。
「修ぴょん、もう射精しちゃったぁ……はぷ、んふ……ちゅる……ちゅぴちゅぴちゅぴ…

…セーエキと玲ちんのお汁が混じった味、エッチな味だよ……んちゅるるるっ！」
力強く脈動する結合部に唇を吸いつかせた美与は、ミルクを舐める子猫のように舌なめずりしつつ、溢れ出す白濁液を舐め取ってゆく。
「修也、あと少しだから……つっ、突き上げて……」
「修也殿、私も……果てさせてください……」
あと一歩で絶頂を逃してしまった玲とクロエは、切なげに身悶えしながら愛撫の続行をねだるが、強烈な射精快感で虚脱状態の修也は、思うように動けないでいる。
（玲さんたちがイくまで、ガマンしきれなかった……。やっぱりアレをやるしかない！）
目を閉じて呼吸を整えた少年は、剣士の遺伝子を発動させた。
後ろめたい気持ちを抱いてしまいながらも、射精の余韻に甘く疼くペニスに、身体の奥底から沸き上がってくる熱いパワーを収束させてゆく。
邪道な使い方なのはわかっていたが、セックステクニックの拙い少年が、みんなを満足させるには、それしか方法がないのだ。
ビクッ、ビクッ、ビクッ、ビキンンッ!!
玲の膣内で力強くしゃくり上げた牡器官は、硬度とサイズを大幅に増し、少女の粘膜鞘を押し広げてそそり勃った。
「ふぁ、あッ!?　修也……力をッ！　あああっ、熱い……はぁぁ～んっ！」

ひときわサイズと硬度を増したペニスに膣奥を突き上げられ、甘く裏返った声を上げた玲の身体が、弓なりに反り返る。

「ちゅぱっ……あはぁ、修ぴょんのオチンチン、凄いことになってる」

少年のペニスが限界を超えていきり勃ち、膣口を押し広げる様子を目の当たりにした美与は、少し怯えた声を上げる。

「くぁ……きつい……修也……すまない、抜くぞ……んっ、ふぁ……はぁあぅ……」

肥大したペニスの圧迫感に耐えられなかった玲が、苦しげな声を上げながら、結合を解く。

ぬちゅ……ジュポッ……。

粘液の鳴る音を立てながら抜け出てきた肉刀は、少し気合いを入れすぎたのか、挿入前とは比べものにならぬほどのサイズに変貌していた。

「すみません、こんなになっちゃいました」

想像以上のサイズになってしまった勃起を恥ずかしげに見下ろしながら、修也は困り顔を浮かべている。

子供の握り拳ほどにまで張り詰めた亀頭は鮮やかなルビー色に染まり、木刀のような硬度を誇示して反り返った肉胴は、愛液と精液でぬめ光っていた。

「うわ、大きすぎるかも……」

「ええ……これでは、修也殿を受け入れられないかもしれません……」
挿入するには苦痛が伴いそうなサイズになった少年の肉刀を見つめながら、怖じ気づく美与とクロエ。
「はぁぁ、僕って、力のコントロールがつくづく下手くそですね」
自信を喪失してうなだれる少年の股間で、ペニスだけがギンギンにいきり勃っている。
(超勃起状態のときは、普通に会話もできるのに、全身発動させると、維持するだけで精いっぱいになっちゃうのは、やっぱり力のコントロールが未熟だからなんだな)
自分の未熟さを、今さらのように思い知る修也である。
「修也、いいんだ。方法はあるから、そのままでいてくれないか？　クロエ、美与、ちょっと耳を貸してくれ」
年下の恋人をなだめた玲は、女の子だけで何やら短く相談し、体位を変更した。
仰向けになった玲の上に、クロエが覆い被さる状態で身体を密着させている。
「うほぉ、玲ちんとクロッチのレズっぽい密着シーン、女のあたしでもキュンッ、ってくるよ。記念写真撮っておきたいかも……」
「確かに……」
美与が頬を染めて言う傍らで、修也も生唾を呑み込みながら、見とれてしまっている。
凛々しい黒髪少女と、クールな金髪少女が裸身を重ね合い、弾力たっぷりの美乳同士を

押しつけ合って、ムニュリ、とひしゃげさせているのだ。
健康的に上気した玲のきめ細かな桃尻と、白人少女特有の、透き通るように白い肌をしたクロエのヒップが上下に並び、その狭間では、重ね餅のようになった二人の秘裂が、玲の中から溢れ出た中出しスペルマと混じり合った蜜の匂いを香り立たせている。
「玲殿……ちょっと恥ずかしいです」
同性として、剣士としても憧れている少女と肌を密着させたクロエは、恥じらいと悦びが複雑に混じり合った表情を浮かべて尻をモジつかせる。
「ンッ……あ、あまり動くな、感じてしまう。……修也、これならいいだろう。この間に……キミのを……」
クロエの肩越しに顔を覗かせた玲は、恥ずかしげな声で挿入をねだる。
「はっ、はいっ！」
玲の意図を悟ってコクリと頷いた修也は、蜜に濡れて押しつけ合った秘部の狭間に、赤黒く怒張した肉刀をあてがい、一気に突き挿れた。
ぬちゅ……じゅぷぷっ……。
熱く濡れて重なり合った秘裂が、上下からペニスを包み込む。
「ンアァァァッ！」
「はぁぁんっ！」

『第三章　剣士姉妹』より

母屋にある風呂場に修也を案内した剛治は、鼻歌交じりに去ってゆく。
彼が自慢したとおり、総檜造りの浴室は、温泉旅館を思わせる、豪華で落ち着いたたたずまいであった。
（はぁ……剛治さんが言ったように、発動維持って、想像以上に疲れるんだなぁ。二時間維持なんて、ホントにできるようになるのかな？）
広々とした湯船の中で身体を伸ばしながら思う少年の耳に、浴室の引き戸が開く音が聞こえる。
「お爺ちゃんから聞いたわよ。池に落ちたんだって？　風邪引かないように、ちゃんと温まりなさいよ」
気兼ねする様子もなく浴場に入ってきた朋香は、湯船の中で身を強張らせている少年を見下ろし、軽い口調で話しかけてくる。
「とっ、朋香さん？　わひっ！」
彼女の格好を見た修也は、素っ頓狂な声を上げてしまう。
上半身にまとっているのは、初対面時に着ていたのと同じようなデザインの七分袖のシャツだが、下半身は、フロント部分に小さなリボンのアクセントをあしらったショーツ一枚きりという大胆な格好である。
湯船の中から見上げた少年の目には、スラリと伸びた脚線美と、むっちりと張り詰めた

太腿からヒップのライン、鋭角に切れ込んだ魅惑的なVゾーンまでが一望できてしまう。
「あ、あの……何かご用でしょうか？」
あわてて視線を逸らし、修也は問い掛ける。
「うーん、用ってほどじゃないんだけどね、まあ、スキンシップよ、スキンシップ♪　背中流してあげるから、上がりなさいよ」
「はい……お手数かけます」
強く出られると断りきれぬ、優柔不断な少年は、タオルで前を隠し、幾分緊張した面持ちで木製のお風呂椅子に腰を下ろす。
「男の子にしては、綺麗な肌してるのね」
背中にシャワーソープの泡を塗り込みながら、問い掛けてくる朋香の吐息には、かすかなアルコールの香りが混じっていた。
「もしかして、お酒、飲んでますか？」
「ええ、景気づけにブランデーをちょっとだけ、ね♪　お酒を飲む女は嫌い？」
ふにゅっ……。
鼻にかかった甘い声とともに、たまらなく柔らかい感触が、裸の背中に押しつけられてひしゃげる。
「ふぁ……！　いっ、いえ、僕の母も、お酒は結構好きですから、お酒好きな女の人は嫌

いじゃないです」
　心地いい弾力を背中に伝えてくるバストの量感に胸ときめかせてしまいながら、上ずった声で答える修也。
「ふうん、お母さんかぁ……まあいいわ。キミ、割とマザコンだったりするでしょ？　甘えられるよりも甘える方が好きで、年上趣味ね？」
　むにゅ、きゅむっ……。
　的確な指摘とともに、背中に押し当てられた爆乳が、緩やかにひしゃげながらこね回される。
「あ、当たってます……」
「んふふっ、当たってるっていうのは、プロファイリング？　それとも、私のオッパイのことかな？」
　イタズラっぽい声で問い掛けながら、どんな高級クッションにも勝る弾力たっぷりの肉果で、少年の背中を嬲る。
「うっ、両方です……」
「キャハハッ、修也君って正直者ね。ほおら、こんなに大きなオッパイ押しつけられるのって、初めての経験でしょ？」
「えッ!?　ええ、ま、まぁ……そうですね」

曖昧な返事をする修也の脳内では、朋香に匹敵する美与の爆乳が揺れている。
「あらぁ、何だか気になる返事ね……どれどれ、心臓の鼓動は……？」
「ひゃっ！」
薄い胸板に、朋香の滑らかな指が滑るくすぐったい感触に、ぴくんっ！　と反応してしまう修也。
「心臓の鼓動は意外と落ち着いてるのね。こうやってオッパイ押しつけて女の子に密着されるのは、初めてじゃないのかしら？　でも、玲ちゃんって、そんなに巨乳だったかな？」
少年の胸板をまさぐりながら、軽く首をかしげる朋香。
「ねえ、玲ちゃんとはキスぐらいしたのかなぁ？　それとも、もっと色々しちゃった？」
答えにくい質問が、甘い声でささやきかけられる。
「あ、あの……ま、まあ……それなりに」
「ふうん、もうちょっと詳しく聞かせて欲しいわ。お互いに触りっことか、してるの？　こういう風に……」
朋香の指が、少年の乳首を捉え、くすぐるようなタッチで弄り回した。
小さな肉粒のような乳首は、たちまちのうちに勃起して、滑らかな指の腹でクリクリと撫で転がされる。
「ひっ！　そっ、そんな……恥ずかしくて……言えません！」

ヒクッ、ヒクッ、ヒュクンッ……。
背中に押しつけられる爆乳の感触と、乳首の周囲を撫でくすぐってくる指の刺激に反応し、若いペニスは意思に反して勃起し始めてしまう。
「フフフッ……オチンチン、勃起してきちゃったね」
タオルを突き上げて自己主張する少年のこわばりを肩越しに見下ろしながら、爆乳美女は、うっとりとした口調で指摘する。
「さっ、さあて、修也君のオチンチンは、どんな手触りなのかなぁ……触っちゃうぞぉ」
イタズラっぽい声を上げた朋香の指が、タオル地の上から勃起の胴をそっと握り込んでくる。
「うぁ、あ、だっ、ダメですよ、朋香さんッ！　ひぁ、あんっ！」
ジワリと圧迫された海綿体から発した甘美な疼きに身を強張らせ、声を上げる修也。
「あらあら、女の子みたいな声出しちゃって。可愛い♪」
羞恥と興奮で紅潮した頬に、チュッ、とキスした朋香は、肉茎を握った指をやわやわと動かして、若い血潮に猛った海綿体の感触を堪能する。
「ふむふむ、興味深い手触りね。あっ、また固くなった。ドクドク脈打ってて、すごく熱いわ……。気持ちいいのね？」
甘い香りのする吐息で、少年の耳朶をくすぐりながら、朋香の指はタオルを突き上げて

そそり勃った牡器官の輪郭を撫で回す。
「う……あ、あはぁ……そんなに……ひぅっ！　くすぐったいですッ！」
白い濡れタオルをピッチリと貼りつかせて反り返った肉刀に沿って滑り上がった指は、カリ首の根本に剥き上げられた包皮を指の腹で撫で転がし、張り出した亀頭冠の周囲を人差し指の先でクルクルとなぞる。
タオル生地越しのもどかしい刺激を受けた肉刀は、ますます力をみなぎらせ、大上段に振りかぶって、ヒクヒクと苦しげにしゃくり上げた。
ちゅるっ……じゅわ……。
尿道内を込み上げてきた男の子の愛液が、鈴口から溢れ出てタオルに滲むのとほぼ同時に、朋香の爪が、切っ先をカリッ、と掻きくすぐった。
「くぁぅ……んっ！」
濡れた鈴口を甘痒い悦波に貫かれ、海綿体が軋みそうになるほど充血したペニスがヒュクンッ！　と大きくしゃくり上げる。
「あ……ヌルヌルしたのが出てきたわ。ね、ねぇ、これって、精液？」
布越しに染み出てきたぬめりを指先で弄びながら、興奮した口調で問い掛けてくる朋香。
「えっ⁉　朋香さんって……もしかして？　初めて……くぁうっ！」
不用意な発言をしかけた修也であったが、放出中の勃起を強く握られて甘い悲鳴を上げ

てしまう。
「わっ、悪かったわね、こういうのは初めてよ！」
肉茎を指で締めつけて責め立てながら、朋香はむくれた声を上げる。
「すっ、すみません。そういう意味じゃなくって……あの……ごめんなさい」
急所を握られたまま、年上美女に謝る修也。
「まあ、いいわ。許してあげる。一族のしきたりに縛られて、この歳になるまで色っぽい経験ほとんどないの。無様よね……はぁぁ」
ペニスを縛めていた指の力を緩めた朋香は、自虐的なため息をつく。
酔いが覚め、酒の勢いが衰えてきたのか、さっきまでアグレッシブだった表情にも、恥じらいの色が浮かんでいた。
「そんなことないです。立派だと思います！」
剣士の遺伝子を持った者としか契ることを許されぬという、三沢家に生まれた女児に課せられる、絶対遵守のしきたりを玲から聞かされている修也は、即座に声を上げる。
「フフッ、修也君って優しいのね。じゃあ、その優しさに甘えて、一つお願いしちゃおうかな？」
色っぽい声でささやきかけてくる朋香。
「ふぁ……なっ、なんでしょう？」

「あ、あのね……キミのオチンチンが、しゃ、射精するところ、見せてくれる？」
ちょっと言いにくそうにしながらも、恥ずかしい要求が告げられた。
「しゃ、シャセイ、ですか？」
この状況下では、そんなに意外なお願いではなかったが、あらたまって言われるとさすがに恥ずかしい。
「うん……。この、固くてたくましいオチンチンから、白いのがピュウッ、って出るところを生で見たいの。いいでしょ？」
返事する前にタオルが取り去られ、恥知らずなほどにいきり勃った肉刀が剥き出しになる。
「へぇ……綺麗な色してるのね……ドキドキしてきちゃう」
うっとりとした声を上げた美女の指が、下腹に貼りつかんばかりに勃起した牡器官の胴をなぞり上げ、初々しいピンク色の亀頭をそっと摘む。
「あはぁ……オチンチンの茎は固いのに、先っちょはプニプニなのね……可愛い」
「はぁうっ！　あっ、はぁ、あぁぁ……そこ……んんっ！」
敏感な先端部を優しい指使いで揉み弄られ、鈴口から溢れ出た先走りの汁を亀頭全体に塗り広げられて、少年は切なげに喘ぐばかりである。
「気持ちいいのね？　ほら、ここも感じるんでしょ？　こうやって……こうすると……ふ

ふっ、オチンチンがビクビクしてる」
見切りの技能を色事に応用して、少年の快感スポットを次々に探り当てた朋香の指は、初めて手淫奉仕するとは思えぬ的確さで若い勃起を責め立てる。
ガチガチに強張り反り返った肉胴部分を絶妙の力加減で圧迫しつつ擦り上げ、特に感じやすい亀頭冠周辺は、親指と人差し指で作った輪っかを引っかけ、小刻みに弾き上げるようにして逆撫でを仕掛けてくる。
「あぁ……ヌルヌルのお汁、いっぱい出てきたわよ。男の子もこんなに濡れるのね、ステキだわ、もっと出して……」
ペニス弄りに夢中になった朋香は、手のひらの窪みを亀頭にスッポリとかぶせ、鈴口から止めどなく湧き出す男子の愛液をローション代わりに使って、張り詰めた亀頭をぬちゅぬちゅと淫音を立ててこね回す。
「このままシコシコって擦ってあげる。ほらほらぁ、射精しちゃいなさい！」
主導権を握った朋香は、興奮した声で淫語をささやきかけながら、先汁にぬめった指で勃起を扱き上げる。
もう片方の手指は、小さな乳首を弄り回して、年下の少年を射精させようと攻勢を強めた。
「う……うぅぅ、あぁ、そんなに……クチュクチュって……んんんッ！」

『第六章　遺伝子を継ぐ者』より

「いいから座りなさい……」
年の離れた姉に向かって、小柄な少女は威圧的な口調で命じる。
「う……な、なによ、ツルペタロリッ子のくせに……」
一枝の妙な気迫に押された朋香は、文句を言いながらも座り直した。
「みんな、考えがせせこましいです。修也さんの器は、そんなに小さくないです」
朋香の隣にチョコンと正座した一枝は、その場にいる全員を見回しながら説教を始める。
「一枝……？」
玲も呆気にとられる中、この場では最年少の少女剣士は、涼やかな声で説教を続ける。
「掟とか、一般常識とか、劣等感とか、そんなものに縛られているから、自分で自分を檻に入れてしまうんです。そんな檻を、修也さんはぶち壊して、わたしを助けてくれました」
クリッと大きな黒い瞳が、修也を映す。
「わたしが、ありったけの想いをぶつけて戦いを挑んでも、全部受け止めてくれたばかりか、全て包み込んで、わたしに悦びを教えてくれました。そうでしたよね？」
ほんのりと頬を染め、無口、無表情な氷の少女とは思えぬ、饒舌で感情豊かな声音で語りかけてくる一枝。
「え、あ、あの……はい……」
ぎこちなく頷く少年の仕草が面白かったのか、一枝は目を細めて、クスッ、と小さな笑

い声を漏らす。
「修也さん。あのときの強さと包容力で、オッパイバカな朋香姉様も、受け入れてあげてください」
「ちょ、ちょっと一枝、いきなり何を言い出すの……？」
うろたえる朋香を黙ったまま見つめ、目力（めぢから）だけで黙らせた一枝は、修也にも視線を送ってきた。
「……もしかして、修也。一枝とするときにも、あの力を使ったのか？」
勘違いしたらしい玲が、声を上ずらせて問い掛けてきた。
「ちっ！　違います。そんなことしたら……一枝さんは壊れちゃいますよ！」
修也の声を聞いた朋香の目が、キラリ、と光る。
「まさかとは思うけど、玲ちゃん、あなた、剣聖力発動状態の修也君とエッチしているの？」
勘違いした玲の問いと、それにうろたえてしまった修也の言葉だけで、朋香はほぼ事実とも言える結論にたどり着いていた。
「えっ？　いつも……というわけではありませんが、ま、まぁ、時々は……」
勘違いから墓穴を掘ってしまった玲は、恥ずかしげに頬を染めつつ白状する。
「あ、あの……剣聖力をどういう風にエッチに応用するのか、実際に見せて、とか言った

ら怒る？」
朋香は、やや遠慮がちな言い回しではあったが、好奇心に目を輝かせながら要求してくる。
「えっ⁉　ここで、ですか？」
「修也さん、毒を食らわば皿まで……ですよ……」
少なからず興味があるのか、一枝もクリッと大きな目で少年を見つめて決断を促す。
「修也……わたしは構わないぞ。美与やクロエという前例もあることだし、お前さえよければ、三人まとめて……愛して欲しい」
頬を染めて言った玲は、朋香と一枝の姉妹に視線を送った。
「わっ、私だって構わないわよ。そうよ、だって、大人だもの。てっ、テクニックの差を見せつけてあげるわッ！」
動揺を隠せぬ様子ながらも、いつもの調子を取り戻した朋香が参戦を告げる。
「……恥ずかしいけど、仲間外れはいやです……」
自分よりもずっと女っぽいプロポーションを持った玲や朋香を意識しつつ、頬を染めて言う一枝。
「じゃあ、発動準備しなきゃね♪」
陽気な声を上げながら、素早く動いた朋香が、修也の袴と下着を一気にずり下げて、ま

だ萎えた状態のペニスを剥き出しにする。
「うひゃう！　なっ、何するんですか⁉」
「ああん、隠しちゃダメよ！　ボッキしてゆく一部始終を、三人で観察してあげるんだから。さあ、剣聖力オチンチン、見せてちょうだい」
すっかりいつもの調子を取り戻した爆乳美女に命じられるがまま、優柔不断な少年は力を発動させた。
「ふぅぅ～ッ！」
発動と同時に、股間で半勃起状態だった牡器官が、ヒュクンッ！　ビクンッ！　と大きくしゃくり上げて、硬度と体積を増してそそり勃ってゆく。
間もなく完全勃起を終えたペニスは、鮮やかに紅潮した海綿体がビキビキと軋みを上げそうなほどに強張り、亀頭は子供の握り拳ほどのサイズにまで張り詰めて周囲を圧倒する。
まさに、大上段に振りかぶられた肉の剛刀だ。
「あ、あまり見ないでください……」
恥ずかしげに眉を寄せて言った修也の巨根が無意識のうちにしゃくり上げ、パチンッ、バチンッ！　と生々しい音を立てて下腹を打つ。
「うわ、すごいわ……。ちょ、ちょっと待ってよ！　こんなになるなんて……。よっ、よおしっ！　最初に全部脱いだ人が一番槍よッ！」

ゴクンッ、と物欲しげに生唾を呑み込んだ朋香は、勝手にルールを設定し、怒濤の速度で着衣を脱ぎ始める。
「ちょっと待ってください！　朋香姉さんは、子供の頃からなんだって競争にしちゃうんですから！　それなら条件を一緒にしませんか？」
性急すぎる従姉を制止し、玲が提案する。
「条件を一緒って？」
「みんな同じ格好をすれば、服装のハンデはなくなります……」
修也の巨根にじっと見とれたまま、一枝が心ここにあらずと言った口調で告げた。
「みんな同じ格好というと、剣道着……？」
「わたしたちの場合、そうなるでしょうね」
朋香と玲は、顔を見あわせて頷いた。

「さあ、これで条件は一緒ね？　勝っても負けても文句なしよ」
三者三様の剣道着姿が、少年の前に並んだ。
成熟した大人の色香をムンムンと放つ朋香のボディは、剣道着越しにも過剰なまでに自己主張している爆乳を張り詰めさせて、修也の視線を強烈に引き寄せる。
姉とは対照的に、一枝の肢体は、未成熟な中に、細く、強く鍛え上げられた名刀のごと

き初々しい色香を潜ませていた。
そして、修也という剣の鞘になることを誓った玲は、完璧に均整の取れたプロポーションを剣道着の上から見せつけている。
少女たちの顔はそろって紅潮し、快楽への期待で目を熱く潤ませていた。
「一番槍など些細なことじゃないですか。わたしたちはみんな、これから修也にたっぷりと愛してもらうんですから」
朋香に声を掛ける玲の顔は、険悪になりかけた状況を脱した安堵からか、何だか楽しげだ。一緒に遊び、剣を学んだ子供時代のことを思い出しているのかもしれない。
「おお、言うじゃない。まあ、セックスもオッパイも、盛り上がりが肝心、ってことよ」
「オッパイは大きければいいというものではないです……」
相変わらずのやりとりをする姉妹剣士。
「三人とも、すごくステキです……」
お世辞でない賛辞の声を上げた少年の巨根が、嬉しそうにしゃくり上げて下腹を叩いた。
「あはぁ、修也君」
「修也さん……」
「修也……」
しゃくり上げる肉刀に誘われたかのように、三人が股間に寄り添ってくる。

互いに目配せし合った朋香と玲は、左右から胸を寄せ、はだけた乳房の谷間に、熱く猛った肉刀を挟み込んでくる。
蕩けそうに柔らかな爆乳と、プリッと張りのある美乳が、互いを押しつけ合ってひしゃげながら、過剰サイズの勃起を包み込んでいる光景は、触覚だけでなく視覚からも、少年を昂ぶらせた。
「んぁ……玲ちゃんのオッパイ、しばらく見ないうちに、大きくなったわね」
「朋香姉さんの胸、すごく柔らかくて気持ちいいですよ」
互いのバストを褒めながら、二人は乳房の谷間から突き出た亀頭に唇を寄せる。
「ちゅっ、ちゅぴっ、ちゅぱ……はむ……んふ、すごく熱くて、大きい。……あぁ、キスしているだけで、私の方がイっちゃいそう。んふ、ちゅぱ、ぴちゅ……」
「ちゅっ……ちゅっ、ちゅぷ……はぁ、修也……」
淫情の血潮で熱く張り詰めた亀頭、その中心を走る鈴口のワレメを境界線として、亀頭の左右に、朋香と玲の唇と舌が這わされている。
「あっ、あぁぁ、舌のザラザラが……気持ちいいです」
味蕾のザラつきが亀頭粘膜を刺激する、甘く痺れるような快感に尻を震わせ、恍惚の声を漏らす修也。
「んはぁ、大きな亀頭ちゃん、いっぱい舐めてあげる……はぷ、んふ、ちゅぱちゅぱちゅ

ぱ……れろぉぉぉ」

ここぞとばかりに、舐めテクを披露する朋香。

「あふ……修也、もっと感じていいんだぞ、ぴちゅぴちゅぴちゅ……んふ」

愛情たっぷりの舌で、優しく舐め回してくる玲。

肉の剛刀を左右から白刃取りしたバストの谷間で、献身的なフェラチオに歓喜した熱い肉柱がビクビク痙攣を起こす。

「姉さんたち、ずるいです！　わっ、わたしも……」

パイズリフェラに出遅れた一枝が、二人の間に割り込んできた。

「ちゅっ、んふ……じゃあ、真ん中、いいわよ」

たくましく張り出した亀頭冠を唇でついばみながら、最も敏感なワレメへの愛撫を妹にそそのかす朋香。

「はい……容赦しませんよ……」

恥じらいと興奮で頬を染めながらも、瞳の奥にサディスティックなきらめきを宿した一枝は、ダブルフェラの快感に震える勃起の真上から、唾液を一筋垂らした。

ぴちゅ……とろぉ……。

熱い唾液が、すでに潤み始めていた鈴口を濡らし、むず痒い感触で亀頭の曲面を舐めながら伝い流れてゆく。

「ちゅっ、ちゅるっ……あは、一枝の唾、甘くて美味しい……これがロリッ子味？」
「んふ、ちゅっ……すごく熱い……一枝も興奮してるんだな」
猛った肉柱で温度を保たれたまま、カリ首のラインまで流れ落ちてきた唾液は、玲と朋香によって舐め取られてゆく。
「うぁ、それ、すごくエッチで……あ、一枝さん？　ひぁうんっ！」
亀頭を中継点とした、少女同士の唾液交換シーンに興奮していた修也の亀頭に、一枝の攻撃が開始された。
「はぷ……ぴちゅ、ぴちゅ、ぴちゅ……オチンチン穴、もう濡れてますよ。ちゅっ、ちゅるるっ……んは……ヌルヌルのお汁、こんなに出して、エッチなオチンチン……」
鈴口に小さな唇を吸いつかせ、透明なうるみを盛り上がらせた先穴を舌先で舐めくすぐった一枝は、少年の顔を見上げて言葉責めを仕掛けてくる。
「こんなエッチで大きなオチンチンは、こうしてあげます……かぷ、はむはむはむ……かぷっ！」
「ひぅ……んっ、あ、あぁ、ふぁ！　歯が当たって……んひぅ！」
ロリータボディの年下少女に冷たい口調で言葉責めされつつ、敏感な先端部を甘噛みされた修也は、鋭く危険な愉悦に、背筋を反らして悶えてしまう。
「ちゅぱ……一枝……すごいな」

カリのくびれを丹念に舐めていた玲は、Sモード全開で亀頭を甘噛み責めするロリ従妹の様子に驚いている。
「はぷ……私たちも負けてられないわよ。かぷっ、あむあむあむんっ！」
妹に対する対抗心を煽られた朋香は、亀頭冠の張り出しに甘噛みを仕掛ける。
「ひゃおうっ！　あ、あぁぁ、噛んじゃダメですっ！　ひぁ、玲さんまで！」
「はふ……大丈夫だ、ちゃんと、手加減するから、かぷっ、あふ、あむっ！」
三少女の歯が、絶妙の力加減で亀頭を噛み責め、柔らかな舌が噛み痕を癒すように這わされる。
それぞれの支配領域を守って愛撫にいそしんでいた唇と舌は、次第に範囲を広げ、交互に亀頭を吸い上げ、先端のワレメに舌を這わせて、男の子の愛液を残らず吸い取ってゆく。
ビクビクと震える勃起の胴は、玲と朋香の乳肉によって拘束されながら揉み扱かれていた。
蜂蜜を詰めたゴム鞠のような弾力が海綿体組織をジワリ、と圧迫し、猛った肉茎に、汗ばんだ乳肌が吸いついてくる。
このまま、肉果の中にペニスが融け込んで吸収されてしまうのではないかと思うほどの、密着圧迫の快感であった。
「うぁ、あああ、タマ……そんなにくすぐられたら、あああぁッ！　お尻はダメですっ！

ふぁ、はぁぁ」

陰嚢やアナルの蕾にまで、誰のものともわからぬ指が這わされ、三人がかりのパイズリフェラに、鮮烈な快感のアクセントを添える。

「うぁ、あぁぁぁ、もっ……もう……出ちゃうっ！　しゃ、射精しちゃいますよぉ！」

硬軟取り混ぜた、鮮烈な刺激の連続に屈した少年の剛直は、早くも射精へのカウントダウンを開始した。

ペニスの根本奥に、熱くむず痒い圧力が収束し、射精筋が甘美な緊張感とともにキリキリと引き絞られてゆく。

「ちゅぱ……いいぞ、修也。ガマンせずに出すんだ……」

「はぁはぁはぁ、修也さんの熱いの、ください」

「修也君、いっぱい出して……」

射精の期待に火照った三つの唇が、亀頭に集中攻撃を仕掛けてきた。

ぴちゃぴちゃぴちゃ、ちゅぷっ、ちゅぱちゅぱちゅぱっ！

三枚の舌に責められた勃起の芯を、気が遠くなりそうな快感が貫き、制御不能の筋収縮が開始される。

「くあぁぁぁ、でっ、出るうううううぅぅ～ッ!!」

グンッ！　と大きくしゃくり上げた剛直が、乳房の拘束を振り切って、白濁の絶頂ジェ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円(税込)

呪詛喰らい師（カースイーター）

［小説：蒼井村正／挿絵：或十せねか］

セクシー退魔師が神様をご奉仕で鎮める伝奇アクション!

ピルグリムメイデンII 白装の騎士

［小説：狩野景／挿絵：ぽち。］

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

魔海少女ルルイエ・ルル

［小説：羽天向／挿絵：ピエール☆よしお］

「魔法の天使ルルイエ・ルル!
地球の未来はルルにおまかせよっ★」

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガッ!! ①〜③
- ●思春期なアダム ①〜②
- ●絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- ●借金お嬢クリス ①〜②
- ●プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
- ●BLANGEL 輪になって踊る愚者の夜
- ●無敗の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ●ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!